One's Life
（より豊かに生きるためのヒントをお伝えします）

さまざまな経験やそのときどきの想いを糧に築きあげ、「昨日より今日、今日より明日」の人生を充実させている、鈴木美朝（すずきみのり）さんの生き方を紹介します。

自分の芯を強く持ち、フレキシブルに生きていく

【Profile】鈴木美朝さん（27）。十和田市出身。趣味の一人旅で、現地人や、国籍・年齢が異なる旅人同士が出会うゲストハウスに魅力を感じ開業を夢見るようになる。2022年県内にUターンし、10月22日に『八戸ゲストハウス　トセノイエ』をオープンした。

八戸ゲストハウス　トセノイエ

『八戸ゲストハウス　トセノイエ』は、経営者鈴木美朝さんの曾祖母トセさんがかつて暮らしていた家を改修した建物。のれんをくぐると、静かな和室に響く振り子時計の音。懐かしの黒電話や、南部地方の郷土玩具・八幡馬をはじめとした、青森県に縁のある装飾や本が出迎えてくれる。

オープン前は、しばらく空き家となっていた建物の改修のためにクラウドファンディングに挑戦。「旅人には、地元の人と一緒に青森の魅力を感じてほしい。そして地元の人には、国籍や年齢、経験も異なる様々な旅人との交流を通して多くの価値観に触れてほしい」。そんな拠点をつくりたいという鈴木さんの思いに共感が集まり、目標金額以上の支援が集まった。

旅先で出会う、一晩だけの友人たち

「田舎の子どもたちを取り巻くコミュニティはどうしても狭く、限定されているため、なかには悩みを誰にも打ち明けられない人もいると思う。家族や先生といった身近な大人の考えに影響を受け、それが全てだと思ってしまう人も多い」と話す鈴木さん自身も高校時代、悩みや辛い思いを誰にも相談できずに抱え込み、〝居場所がない〟と感じていたことがあった。

20歳、イタリアのヴェネツィア大学留学を経験。旅行に比べて、一ヶ月の滞在は海外に〝暮らす〟ような感覚だったという。そんな日々が忘れられず、帰国後は、一人旅やゲストハウスへの宿泊を始めた。旅先で出会ったゲストハウスのオーナーたちは、自給自足の暮らしを通じて自然と共に生きる楽しさや、現地の魅力を目の前の人に楽しんでもらいたいと、自分の時間を割いて教えてくれ、経済的な価値観では得られない〝幸せ〟のあり方について考えるきっかけを与えてくれた。

ゲストハウス内では上下関係は存在せず、フラットな関係を築くことができる。ゲスト同士はいわば一晩だけの友人。だからこそ親しい人には言えない悩みや思いを打ち明けられる存在となり、鈴木さんにとって心の拠り所になったという。そこで出会うのは、国籍や年齢、性別、育ってきた環境、考え方もキャリアも異なる人たち。彼らとの出会いが世界の広さや、さまざまな生き方を知るきっかけに。そんな日常では経験できない、特別な時間を共有した一晩だけの友人のなかには、いつの間にか何度も会う馴染みの友となった人もいるのだとか。

今を生きる

旅先での経験で、漠然と自分の中で築かれた固定観念やルール・しがらみこそが、自分自身を狭い世界に縛り付けていることに鈴木さんは気付かされたという。そしてコロナ禍、仕事や生活のかたちが一変してしまったことがきっかけとなり、東京に留まる意味、そして自分の本当にやりたいことは何かを考えるように。そんなとき、『自分がやりたいと思うことを書き出す』ワークショップを実践したところ〝自然の近くにいたい。ゲストハウスをやりたい〟という本心が文字として浮き彫りに。今までは自分の能力を自分で決めつけてしまったり、自分を抑えつけたりしていたのかもしれないと考えた鈴木さんは、ずっと心の中にあった〝やりたいこと〟のために動き出した。

人生は、結婚や出産などのライフイベントで変わるもの。世の中は感染症や災害、その他の要因で大きく変わる可能性がある不安定なもの。そのなかで自分の芯を持ち、ブレないようにしながら変化する世の中に対してフレキシブルに生きることが大切だと話す鈴木さん。「今を生きる。自分が好きなときに好きなことができるように、日々考えて生きていきたい」。

やると決めれば、その道は拓ける

できないと決めつけず、本心と向き合うこと。自分からしがらみに囚われてしまわないこと。そして少しずつ行動し、多くの人との巡り合わせでここまで来ることができたのだと鈴木さんは言う。「ゲストハウス経営をすごいと周囲に言ってもらえるが、きっと誰にだってやりたいことを叶えるチャンスはあると思う。私自身、Uターンすると心に決めてから、移住プログラムに参加したり、先輩起業家に出会えたりと、自然とゲストハウス開業への道が拓けたと感じている。やりたいと感じたことを、やりたいと思い続けること、またそれを言葉にして言い続けることが大事」。

かつては家族が集い賑やかだったというトセおばあちゃんの家が、今は『トセノイエ』として人々を繋ぎ、新たなコミュニティを生みだす場所に。地域や旅人の出会いの場でも〝居場所〟でもある、そんなコミュニティの拡大・継続を目指し、鈴木さんは活動を続けている。

（取材：なつめ）